


ホストファミリー
ご経験者からの声



ホストファミリーを始めたのは、子供に英語が身近にある環境を与えたかったから。でも留学生は日本語が上手で、子ども達は歳の離れた友達として外で鬼ごっこをしたり、勉強している姿を見て刺激をうけたり。フィンランドにサンタさんがいるように、中国には〇〇さんが、シンガポールには〇〇さんが...と自分の知っている誰かと世界を結びつけて、世界に目を向けるきっかけをこの経験を通して出来ていることに感謝しています。大変なのは食事作り?いえいえ、毎日嫌でも家族に朝晩準備している母なら絶対大丈夫です!"おもてなし"ではなく、"家族の仲間に入れる"気持ちでぜひやってみてください。

三人の子供が巣立ち、私達夫婦は定年退職を迎えました。旅行やガーデニングと今まで、出来なかった余暇を楽しんでいく中、現役時代から関心のあった「ホストファミリー」に挑戦することにしました。三回のセミナーで留学生やホストファミリーの皆様と接し、共働きの方、子育て中の方と様々です。留学生とは一緒に天ぷらを作ったり、函館山に登ったりと、子供部屋は新たな異国の息子や娘の部屋になり、英語の出来ない私達ですが、気持ちは通じ帰国後も楽しかった函館の日々の手紙をくれたり、若さと元気をもらえます。「シニアデビューおすすめですよ」。

とてもすてきな学生でした。2歳児の息子も毎日楽しく過ごしていました。朝ごはん、夕ご飯は家族みんなで食べることができなかったけど、誕生日にケーキを作ってくれたり、BBQしたり、ご近所とも仲良くしてもらったり、道南観光に行ったりと、毎日楽しかったように思います。彼女は上手に日本語を話し、家ではずっと日本語でした。

でも私たちが話す言葉でわからないことをその場でわからないとは言わず、約束の時間がまもれない時がありました。それを彼女は悪いと感じたわけではなかったのもので、その時注意をしたことがありました。

忙しいスケジュールの中、彼女はたくさんのことを私たちに教えてくれたと思います。私たちも彼女と共にたくさんのことを学びました。

ホストファミリーをすることによって、日本にいながらも留学生を通じて世界を知ることができる、異文化を体感しながら、色んな違いについて疑問を持ち、考えることができる、互いの違いを尊重し、受け入れ理解する力がつく、問題解決力が身につくなど、さまざまなメリットがあると思っています。特に、子供たちにとっては、これの貴重な経験が今後、自分らしく人生を歩んでいく上での糧になっていくと確信しています。また、機会があれば是非やりたいです。

セミナーに参加している友達の話を聞いたりして、とても楽しかったです。その中で日本人のアイデンティティについて改めて考えることができ、毎年色々な国の方とコミュニケーションできる幸せを感じました。たこやき作りや一緒に勉強、チョコプレート作りなど、日常の中に気を使わず、子供にとっても大いにプラスになることばかりで感謝です。

私たちは1日目から会話が弾み、とても楽しい2ヶ月間でした。というのも、お互いがテレビドラマが好きで同じアイドルのファンという共通点がありました。テレビを見たり歌を聞いたり、毎日「キャーキャー」騒いでいたことを思い出します。「お願いがあります」と言われ、卵焼きとチャーハンの作り方を教えて一緒に作った、楽しい思い出もあります。

苦勞したことといえば、一度、疲れなどから体調を崩し、どこがどのように具合が悪いのかうまく伝わらず、困ったことがありました。その際には、事務局に相談し、とても助かりました。

学生は初級クラスでしたが、コミュニケーション能力が高く、また私たちと話そうという意欲が高い学生でしたので、私たちも彼と一緒に過ごす時間をとても楽しく感じました。

我が家では学生自身に、部屋の週1回の掃除とシーツ洗濯をお願いしています。彼は綺麗好きで、頻繁に掃除や洗濯をしていました。最終日にもシーツを全て洗濯して帰ったので、その律義さに驚きました。

小学校6年生の息子にとって、学生はとても良いお兄さんでした。一緒に家でゲームをしたり、学生が持ってきたギターを弾いたり、二人でアミューズメントセンターに出かけたり。私たちもとても助かりました。

明るく優しい性格でしたので、子どもたちもすぐに慣れてドキドキ嬉しそうでした。留学生と息子たちは一緒に漢字の勉強をしたり、留学生が長男のことを「先生」と呼んだりして長男も嬉しそうでした。別れる前日に、アメリカで普段食べている「うどん」を作ってもらいました。作る工程も楽しかったですし、味噌ベースのうどんは新鮮でおいしかったです。

留学生の受け入れは、とても楽しく、もちろん不安もありますが、家族にとってステキな刺激になるように思います。留学生とは、家族として生活し、今でも大切な家族です。わたしと旦那はまだ年齢的にお父さん、お母さんではないなあと感じたので、受け入れた留学生には自分たちの名前を呼んでもらって生活しました。私にとって、彼女は今も妹のようです。

今年の彼女は、笑顔が可愛く、頑張り屋で、息子と毎日名前を呼びあうのが日課でした(笑)彼氏と彼女みたいで、私の毎日の笑顔の源になりました。

彼女は真面目なのにおもしろい得意技もあったり、毎日新しい彼女を発見していく日々でした!! 私たちは普段の生活は変えず、ご飯の時もないなら先に食べ、お風呂は、ご飯食べたらずくと、約束をしながらうまく生活したようにおもいます。

また、彼女がきたら、いつでも迎えてあげたいと思います。

四半世紀以上もホストファミリーを続けられたのは、初めて受け入れた女子留学生ケイシーとの出会いです。初めはお互いに緊張、でもすぐに打ち解けて、8週間は良く学び、よく話し、良く食べ、よく遊びました。この喜びがその後の学生との付き合いに生きています。

「えっ、飽きないの?」と聞かれますが、毎年全く違う学生との交流は新鮮です。「みんな違ってみんないい」。ケイシーは我家の一人娘より1歳上で今でも姉妹のようにネット上で付き合っています。

最新の留学生はベン。興味がなければ乗ってこないが、興味があることには目いっぱい感激を表わしてくれる楽しい子。最近のメールには、一緒に見ていたテレビ番組をアメリカでも一人で観ながら思い出に感動、すぐ函館に戻って八幡坂の雪景色を見てみたい。なんていまだに感謝の気持ちが書いてあって泣かせるねえ。

食事が口に合うか心配でしたが、作るものは美味しいとなんでも食べてくれたので良かったです。外食も特にラーメンが大好きで、家族もラーメン好きで話もよく合いました。とても日本語を話すことに一所懸命でしたので、帰ってくると今日のエピソードを上手に話してくれました。なのでクラスメートのあだ名や先生の話など、とても詳しくなりました。

スローガンである「笑顔と達成感」は、留学生だけでなくホストファミリー側にもぴったりと当てはまるものでした。留学生さんの笑顔がとても素敵で、我が家は以前よりも毎日笑顔でいることが増えました。コミュニケーションに時間がかかることもありましたが、ジェスチャー、絵で書いてみる、辞書で調べる等、色々な方法で自分の思いを伝えるという過程がまた楽しく、伝わった時にはそれが満足感、達成感として得られました。

一緒に七夕の星祭りに参加しました。一緒に花火大会のパーティーをしました。一緒に朝市で海鮮丼を食べたり、我が家のお気に入りのレストランに行ったりしました。一緒に函館山からの夜景を見て感動しました。まだまだ思い出はつきませんが、最後に言った言葉が忘れられません。

「全部楽しかったけど、一番の思い出は一緒に笑ったことです。私たちはよく笑いましたね!」

・・・共に涙してしまいました。遠慮しないで、お互いの考えを述べ合い思いやりの気持ちを持つことで、素敵な関係が築けることを実感した8週間でした。

長年ホストファミリーをしてくださっているご家庭からいただいたメッセージです。

年が明けて2カ月も経つというのに、いつも、テーブルの上に置かれた3枚の年賀状に目が行きます。1枚は、カンボジア青年と結婚し可愛い子宝に恵まれた長女からのもの、もう1枚は、米国サンフランシスコ市に住む次女からのもの、そして最後の1枚は、同じくカリフォルニア州の別の都市に住む米国人弁護士からの家族全員が写ったものです。

思えば、長女がカンボジアに渡ったのは15~16年前、次女が米国に渡ったのは20年ほど前でした。そもそも、娘たちがカンボジア行きと米国行きを決断したキッカケは、30年以上前にHIF（北海道国際交流センター）が主催する「つどい」に参加して、後に弁護士となる米国人青年をホームステイさせたことでした。以来、「つどい」だけでなく「JJ（日本語日本文化講座夏期セミナー）」参加学生も毎年のように受け入れ、今も、多くの人達と連絡を取り合っています。

そうした外国の若者を受け入れているうちに、まだ小学生だった子供の心の中に潜んでいた外国人に対する距離感が次第に薄くなり、気が付いたら、長女は青年海外協力隊の一員としてカンボジアに赴任することになり、また、そうした環境が今度は次女の心に火を付け、米国行きを決断するに至ったのです。お蔭で、私共夫婦も海外旅行を楽しむことが出来、おぼろげながらも世界の情勢と実態を垣間見て、認識を新たにすることが出来ました。それはそれで貴重な経験です。

私共夫婦も齢を重ね、昔のようなお手伝いが出来なくなりましたが、それでも、一生、HIF（北海道国際交流センター）のお仕事に関わって行きたいと思っております。そして、それが、結果として、若い人達へのバトンタッチのお役に立てれば幸いです。HIF（北海道国際交流センター）の仕事が続く限り、函館、いや日本の未来は明るい、そう信じます。